

幼児の發達程度を檢せよ

東京女高師附屬小學校主事

堀

七

藏

—
毎年十二月頃になるに、幼児教育の編輯子から原稿を強要せられる。それで小學校入學に關することを執筆するのでか尋ねるに、左様でもない。「何でもよい」といふことであるが、さうも入學に關することを含んだ事柄を要求して居られるやうにも推測出来る。

兎に角十二月になるに、翌年四月より學齡に達した子供をもてる親の多くは、そろそろ入學に關する心配をなすのが常であり、幼稚園の保姆の方も多くは小學校入學を懸念せられるやうである。これは誠に結構なことではあるが、多くの母親の心配でも、多くの保姆諸君の懸念でも、私の眼から見るに取越し苦勞であると思はれることが多い。

二

學齡兒童は、その居住する市町村立小學校に入學するのが本體であり、今日實際に於ても左様である。しかし東京、大阪、京都など大都市であるに、市町村立小學校、即ち公立小學校の外に、師範學校の附屬小學校の如き府縣立の小學校があり、また學習院、女子學習院、男女の高等師範學校附屬小學校の如き官立小學校がある。またいろいろ特色に富んだ私立小學校も少くないので、自然、小學校入學に際しても、いろいろ選擇が行はれる實情である。殊に中等學校入學の際無試験で入學出来るといふやうな小學校、或は中等學校入學歩合の率が高い小學校といふやうな希望が多いために、子の教育に一見識のある家庭では、競つて附屬小學校などの入學を希望せられる。従つて茲にも入學試験地獄を現出するといふ一部の非難がある。「一體、子供は何もこの小學校に入學せねばならぬと考へないでせう」といふさうではありません。是非こそこの學校でなくては入らないと申しますよ」といふ方が少くない。しかしそれは親や兄弟がそ

んなことを言ふから、當人も矢張り眞似をするだけのことにすぎない。それで子供が入學しない前から、「この學校がよい」さか、「この學校は中學校に連絡するからよい」さか、「女學校に無試験で行けるからよい」さか、いろいろな理由をつけて子供に學校の品等をつけさせることはさうかと思はれる。幸によい學校といふ小學校へ入學出来るさよいが、その學校に入學出来ないさには、所謂よくない小學校に入學させねばならぬことになる。するさ小學校六ヶ年の間、即ち在學中常によくない小學校にあることになつて、誠に面白くない。子供には、「自分の學校が一番よい學校」、「自分の先生が最もよい先生」といふ觀念を常にもたせることが最も大切なのに、その觀念を入學當初から失つてゐることになつて頗る教育的でない。

三

公立小學校では、義務としてその學區に居住する學齡兒童を入學させねばならぬから、入學前に當つて兒童の身體検査をしたり、知能検査をなすことがあつても、それは入學の許否を決定するためではない。これから始める小學校教育の參考となすための身體検査であり、知能検査である。身體検査をして病氣があれば豫め治療をさせることが肝要であり、殊に傳染性の疾病があればそれ相當の手當を施させねばならぬ。入學後の四月、検査をなすのは全校兒童に施すもので、規定によつて必ず施行せねばならぬ身體検査である。

入學前に行ふ知能検査は、その發達程度によつて學級なごを編成するに必要である。さもなくとも第一學年の教育を始めるに當つて學級兒童の發達程度を知つてゐなければならぬ。小學校では入學兒童の發達程度やそれらの個性を十分知悉してそれに適應した教育を施すことが頗る肝要なるにもかゝらず、兎に角兒童發達の程度に頓著せず、教科書にある教材を器械的に教授してゐる場合が多い。また一學級の兒童がそれらの異なつた個性を有してゐることを無視して劃一的な教授をなすものが多い。殊に活動が旺盛で、暫らくもじつとしてゐるこの出来ない兒童を無理に教室に靜座させるやうな教育法をとり、一時間中一日中兒童を叱り通すといふやうな教師が少くないのは頗る不適當といはねばならぬ。

四

附屬小學校なごで入學者を決定するために行ふ身體検査でも知能検査でも、凡て滿六歲兒の發達標準によることは勿論である。入學檢定に於て、球投げをさせたにしても、それは滿六歲兒にしてこの發達情況を検するものである。球を投げ

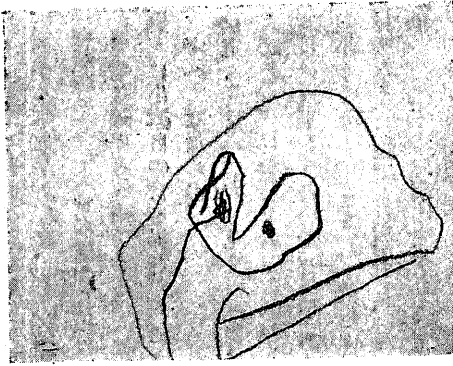
させて兒童の態度や四肢の運動状態を検することが主眼である。先生が「この球を投げて見よ」と命ずるに、「僕は投げない」と拒否する兒童があれば、その兒童は従順でないことが分る。「さうして投げないか」と教師が尋ねるに、或る一男兒は「僕は地球のやうに大きな球なら投げますがそんな小さな球は投げない」といつて、さうしても投げないことがあつた。このやうな兒童は餘程考へ物である。この兒童には果して地球はごんなものか、分らう筈もなく唯附添つてゐる大人の言葉を鸚鵡返しに出鱈目の言を繰返したにすぎない。決してその兒童の發達が大いにすぐれて居り將來大人物になる素地があるなご考へてはならぬ。

また檢定を受けんごする兒童に母親は、「先生が問はれたならばよく考へて返事をしなさいよ」と、幾度もくも言ひきかせる人がある。しかし子供のこごであるから、よく考へるのは普通でない。兒童は教師の問に應じて考へたこごを反射的ごいふ位に返事をするのが普通である。尤も教師の間ふごころをうはの空できき、或は不注意で全くきかないで、出鱈目の返事をするものが多い。故に「先生の問はれるこごをよくきいて返事をしなさい」と駈けるこごは肝要である。單に先生だけでなく、親でも兄弟でも、他人のいふごころをよくきく態度は大に駈ける必要がある。しかしよく考へる態度を小學校一二學年の兒童に要求し之を駈けようごしても實は容易でない。曾つて入學檢定のこご、ごの先生のこごでも首を傾けて考へる風をなし、最後まで一度も返事せずして全部の檢定を通りすぎた兒童があつた。その檢定を終つた後、母親が「何ご答へたの」といふに、「何も答へなかつたの」といふ。「さうして答へなかつたか」ときき、「私考へてゐるご先生は次へごおつしやるもの」とごその兒童は泣出す。「さうしてそんなに長く考へてゐたの」と、母親がせき込んできつ問するに、「だつてお母さんがよく考へなさいごいつたじやないか」と益々はげしく泣きむせぶごいふわけ。勿論何も返事しないから、この兒童は不合格ごなつたのであるまいが、その原因は専ら母親にある。母親があまり大事をこつて、兒童の本性に反するこごに氣付かず、「よく考へてよく考へて」と、八ヶましくその子供に要求したからである。

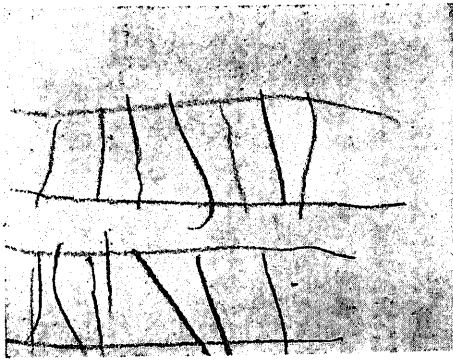
五

入學檢定の準備ごして、いろくごのテストを練習させる場合が少くない。例へば、「林檎ご蜜柑ごごが違ふか」といふこごを觀念的に、「色が違ふでせう。」「皮がちがふでせう。」「中がちがふでせう。」「よくおぼえておくのですよ。ごいふご合に相異を三つなり四つなり記憶させるやうなテスト練習は面白くない。兒童に明白な觀念がなくごも、記憶してゐて答へ

第一圖



第二圖



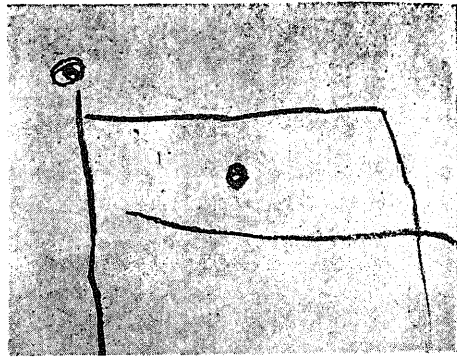
るので、兒童の知能を検するこころにはならぬ。従つて検定者の方ではそんな問題を出さないのが普通である。事物をよく観察して比較する能力を検するのを目的とするのであるから、同じく林檎であり、蜜柑であつて、兒童が観るこ必ず發見出来るやうな相異のあるものを観察させるのである。兒童がよく観察せねばならぬやうな問題である場合に、「林檎が出るここういふこころを答へなさい」か、「蜜柑が出るここういふ風に答へなさい」を指示したり、大人の觀念を器械的に傳授させるやうな練習はまこころによくない。それよりも兒童の眼前にある事物につき具體的に觀察させるやうに指導せねばならぬ。梅の枝と椿の枝を觀させて、その觀たこころの相異を發表させるのはよいけれども、「梅は落葉木でせう、椿は常緑木ですよ、よくおぼへて置きなさい」といふやうな練習は却つてしない方がよいのである。

六

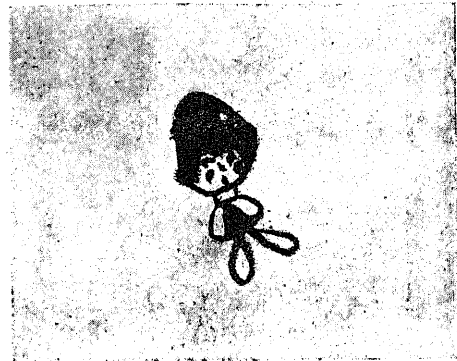
また入學検定にどんな繪を描かせられるか、想像をしていろいろ練習させるこころもよくない。「家が出るここういふやうにかくのです」か、「山が出るここういふ風にかくのです」か大人の觀念畫を兒童に強要するのはよくない。

幼兒の畫を觀察するに先づクレヨンでも色鉛筆でも、無暗に紙に引はつて線をかき時代を経て、人間なりお馬なりをかき時代に入る。この時代の幼兒は人をおもひ顔と手足があるだけで、胴がない。胴なきは幼兒にはぎうでもよい時代である。顔をかくと目玉と口とあればよいので鼻や耳は問題でない。この時代の幼兒に對して、「そんな胴のない人間があるか」、「鼻のない顔

第三圖



第四圖



があるか」さ八ケましく注文するところは適切でない。肩や臂のところは問題でなく、掌もなくてよい。唯指が五本出てゐるに満足してゐる時代である。勿論この時代の幼児に實物を寫生させようとしても駄目である。先生の顔をかいてもお母さんの顔をかいても、一向にそれ／＼の特徴が出ない。若し相異を表現するとなれば、頭髮さか着物さかの相異を以てする。眼や口を正面にかくが、鼻は横顔にかゝねばならぬ時代にあるのは小學校に入學する兒童である。

第一圖は幼稚園年少組の幼児であるが、最も幼稚な方でクレオンを使って塗つてあるが、一體何を書いてあるか、吾々大人には分らない。しかしこれを描いた幼児には何を書いたか分つてゐるかも知れない。第二圖も第一圖と略々同程度であるが、大人から見るとミレールも想像出来るが、唯横と縦との線を組合せたにすぎないやうである。第三圖になるまで丸の旗を描く積りであることが明白である。金の玉、日の丸、旗竿、旗の地なさが明白に表現せられてゐる。第四圖も第五圖も、また第六圖も幼稚園年長組の幼児の繪であるが、それ／＼描いた月、日が異なり、描く目的が異なつてゐるやうである。第四圖では殆ど胸がない。それでも胸飾は忘れずにつけてある。手足の指なさは勿論、表現してない。第五圖になるに、顔が頗る特徴づけられてゐるが、胸から下は頗る粗末である。勿論鼻は正面から書けないので横に曲げた線で表現してゐる。第六圖では着物の模様が目立つてゐるから、胸が大きくなつてゐる。勿論、胸はさうでもよいので着物だけが意識せられてゐる。

第五圖



第六圖



第七圖



第八圖



は胸と脚との釣合なきは全くなつてゐない。しかし第十圖は頗る實物に似てゐる。殊に靴のあたりにしても、手の工合でもポケットなきも入念に寫生をしてゐる。第十圖の幼兒は、繪では小學校の三四年位である。

第七圖から第十圖は先生を見える通りに書きなさいといふ寫生畫である。幼稚園の年長兒の繪のうちまい者が寫生したものである。第七圖では靴のミところは實際見ないで描いてゐるし、第八圖はわざわざ後手をして見せたミところを描いてゐる。第七圖も第八圖も髪を分けて居り、耳を描いてゐるし、胸の邊は入念に觀察して表現してゐる。第九圖と第十圖とは共に耳は問題になつて居らぬが、第九圖



第十圖



七

幼児の數觀念の發達についても十分考慮せねばならぬ。「私の子供は百まで數へられます」「得意がる親があるが、只一二三百まで數へても、果してその數觀念が發達してゐる

は限らぬ。九官鳥でも百まで眞似することが出来る。反對に「私の子供は二十までしか數へられぬ」を悲觀する親があるが、それは決して悲觀する必要がない。試みに四つのビスケットを出して「いくつあるか」を尋ねるを、或る幼児は、一つ二つ三つ四つを數へて「四つ」を答へる。また或る幼児は、一、二、三、四を數へて四を答へる。更に或る幼児は指で一つ押へて數へるのでなく、眼で數へて四を答へるものもある。四つを一目して四を答へるものもある。同じ圓いビスケットを五つ横に並べて、一寸直觀して四を答へられる幼児は四の數觀念がよく發達してゐる者である。同じ圓いビスケットを五つ横に並べて、直に五を直觀するものがあり、縦一列の方が五を直觀し易いものもある。更に縦に三つを二つに並べて即ち三つにするのを、横に三つを二つに並べて三つにするのを、或は三つを二つに並べるのを、いろいろ並べ方によつて五の直觀が異なるものである。

また四のビスケットを出して「いくつか」を尋ね、更に三つ出して「皆でいくつか」を尋ねるをいろいろの程度がある。四に三で七を、直に答へる兒童もある。また四つを元にして五つ六つ七つを數へて七を答へる兒童もある。そのとき、目で數へるだけのものを、實物を一つ一つ押へて數へるものでも發達程度が異なることを勿論である。更に四を初めから數へ、それに三つを數へ足して七を答へる程度のものもある。この中には七を正しく數へることが出来なくて六をいつたり、八

こいつたりするものもある。また一々数へないで、四ミ三ミ、實物を見て出鱈目に六ミ答へたり八ミ答へたりする児童もある。小學校入學検査の準備としては出鱈目に六つこいつたり八こいつたりするものよりも、一々数へても七ミ正しく數へるここの出来る方がよい。勿論四を直觀し三を直觀し、直に七ミ計算し得るに超したここはないが、小學校に入學する満六歳の幼兒には大人の如く四ミ三ミで七ミ、直に答へられるやうに數觀念の發達してゐる者は稀である。器械的に四に三足して七ミ暗記さして置いた兒童には、四つのビスケツトを出し、次に三つのビスケツトを出して皆でいくらか尋ねるこ、答へられないのが普通である。

要するに入學検査の準備としては、幼兒が正常に發達するやうに練習すべきもので、單に大人の觀念を器械的に記憶させるが如きここは愚の骨頂である。勿論檢定者が器械的な記憶力を檢することもあり、幼兒の判斷力を特に檢することもあるが、ここまでも幼兒の智能の發達程度を檢するもので、記憶的な知識を檢するのではない。

文部省母の講座

本年度の文部省主催の母の講座は一月二十三日から東京女子高等師範學校講堂に開催せられ、毎週月、水、金の三日づつ、午後一時から四時まで講義がある筈です。講師は、東京女子高等師範學校長下村壽一氏、同教授倉橋惣三氏、同講師岡ハツノ氏、同講師佐々木林次郎氏の外、時局と經濟、新生活建設、日支事變戰局、傷痕軍人保護、日本美術の話等夫々専門講師の講話があり、特別見學として帝室博物館、愛育研究所等の參觀が講義と併行して行はれる。聴講は母に限るが、東京女子高等師範學校母の講座掛へ申込みれば、さなだでも許可されるこいふここです。申込は早い方がよろしいが、一月二十二日まで受け附けられます。

各幼稚園のお母さま方へお勧めになつたらよろしいと思ひます。

(編輯部)